OB-28

遷延性意識障害の看護プログラムの開発ー生活の予後診断に基づく看護実践ー(第3報)

秋広 由美子[1]、紙屋 克子[2]、山中 貞子[1]、相野 太一[1]、大塚　翼[1]、金井 洋平[1]、岸部 友美[1]、佐藤 三保子[1]、竹本 修代[1]、小嶋 昌子[1]

[1]自動車事故 対策機構　千葉療護センター、[2]静岡県立大学看護学研究科

【はじめに】当センターでは今年度、自動車事故対策機構（以下 NASVA）プロジェクトによる「生活の予後診断に基づいた」新看護 (紙屋) プログラムを開始し、改善がみられたので報告する。【事例】交通事故後遷延性意識障害となり 5 年経過した 28 歳、男性。入院 16 カ月後 2 食の経口食が可能になる。右上下肢の動きの合目性は低く、指示動作不可能。視覚は不明で、笑顔や発声もあるが意思伝達困難。NASVA スコア 50 点。治療リハビリ期間を経て在宅退院準備中である。【方法】実施看護師は 5 日間のプログラム研修受講。生活予後診断に基づいた評価と目標設定：退院後の生活において家族の介護負担ができるだけ少なくなる身体をつくる。下位目標:安定した座位姿勢と、足底着床、頸部保持が可能。舌の動きの改善、口唇閉鎖 (食べるための口作り)。手・足の関節可動域の改善（物をつかめる手)。客観的指標を得るため筋硬度･皮膚温･血流の計測を実施。【結果】4 週間プログラム開始 1 週目に患者は約 3 分の胡坐座位を行った。経口食では開口が良好となり摂取時間は短縮した。状況に合致した発声や笑顔が出現した。腹臥位で上肢、頸部、腰背部の自発的な動きが確認されるようになった。生活像の改善が可視化出来るよう詳細スコアを作成した。【考察】温浴刺激、用手微振動などを効果的に組み合わせたことで身体の拘縮・変形の改善ができ、更に口腔アプローチが咀嚼・嚥下運動を促進した。短期間の集中的なプログラムの施行により患者の反応に改善が認められてきたことは、家族と共に概念に基づいた具体的実践に対する認識を深めることが出来た。今後の課題はマンパワーの結集と効率的なプログラム作成である。